【　図画工作科　】

自分らしいよさや可能性を発揮し，つくりだす喜びを味わう図画工作科学習

～　意欲の高まりと表現のひろがり　～

1「意味と内容」がひろがる図画工作科の学び

図画工作科の学びは，色や形によくかかわる活動の中で，それらと自分との関係をつくりだしていくことによって成立する。

図画工作科学習において，子どもが「意味と内容」をひろげているといえるのは，

- 対象とかかわるうちに次の活動を思いつき，意欲的に活動を進めている姿が見えたとき
- 対象へのかかわり方に違いが表れ，その活動に質的な変化が見られたとき（こだわりが生まれたとき）
- まわりとのコミュニケーションから，今までもっていた，対象へのイメージをつくりかえながら活動している姿が見えたとき

であろう。

具体的に，１年生の学習「せかいに一つだけのぼうし」で考えてみる。この題材は，ダンボールを中心素材として，自分らしい発想を活かしながら，せかいで一つだけのぼうしをつくることをねらいとしたものである。まず，子どもたちはそれぞれ，ダンボールを手にしながら，思い思いのぼうしをイメージしはじめた。工夫しながらぼうしの土台となる部分をつくる子，飾りにするものをさがす子，ぼうしの背の高さや縁の広さなどを考える子…などと表現がひろがっていった。そんな中で，子どもたちのそれぞれの活動に変化が生まれてきた。つくっていく中で，表したいイメージがしぼられていき，細かなところにまで思いを注ぐ姿や，自分の思いのままに進めながら試行錯誤を繰り返し，気に入った表現を探す姿，まわりの友達と交流して，そのよさやおもしろさを共有し，新たな表現を見つける姿などがそうである。

図画工作科では，このような「意味と内容」がひろがっていく学習を目標としていきたい。そのためには，子どもたちの表現活動のさまざまな場面を教師がどう捉え，どのように支援するかが重要になってくる。それには，一人ひとりの子どもを丁寧にみとり，子どもの思いを受け入れ，適切な支援をすることが必要であると考えている。

２年生「つくろうぱっくん」より

2　図画工作科でめざす子どもの姿

（1）図画工作科学習がめざすもの

子どもは，自分の思いや願いを絵にしたり，形に表したりする，人としての根源的な表現の欲求をもっている。この欲求を満足させ，表現の喜びを味わうようにすることが図画工作科の重要なねらいである。子どもは，題材からイメージしたことや，材料の形や色などの特徴から思いついたことをもとに，次から次へと活動を続け，自分の思いを表し，可能性を試し，ものなどの存在の感じを楽しむ。このような活動を通して，子どもは想像力を働かせ，形や色の感じやその組み合わせに気づき，思いにあった表し方を見つけ，手や体全体の感覚を思いのままに働かせながら，自分らしさを育んでいる。それは，表現の欲求を満たしながら，持てる力を主体的，創造的に働かせ，よさや美しさ，楽しさを味わい，豊かな心が育まれている姿であるともいえる。そこで，図画工作科では，子どもが自らものをつくりだす楽しさを味わうことを重視し，一人ひとりが自分らしさやよさを活かした創造活動の基礎的な能力を高めることを目指している。

（2）図画工作科学習で見えてくる子どもの学びの姿

図画工作科学習において子どもの学びの姿が見えるのは，子どもが対象に，より近づこうとしながら活動を進めており，その子の感性や感覚，表現の方法が具体的に表現活動の中に表れているときであると考える。

具体的に，1年生の学習「だいすき　ザリガニ」で考えてみる。この題材は，クラスの子どもたちにとって身近な生き物である，ザリガニに目を向け，その姿にじっくりと迫り，自分なりに感じたザリガニを生き生きと表現させたいと願い，設定したものである。

子どもたちは，だいすきなザリガニをたっぷり触り，ザリガニと十分に遊んだ。遊びながら，今まで気がつかなかったザリガニの特徴を見つけたり，大きな爪や体のブツブツを触ったり，体のつくりや色に注目したりして，そのかかわりを楽しんだ。そして，そこから，自分が感じたことをどう表そうかと考え始める子，感じたことをとにかくかいてみようとする子，ザリガニを見に行ったり触ったりすることをかきながらたびたび繰り返しすすめていく子，などと，子どもたちはそれぞれのやり方で，自分らしい表現をさがしていった。そこには，子ども一人ひとりのザリガニへのかかわり方や表現の仕方，活動の進め方に違いがみられた。

子どもの学びを成立させるためには，教師が一人ひとりの子どもに寄り添い，子どもが持てる力を働かせている様子を捉え，その子らしさの表れをみとり，適切な支援をすることが必要不可欠となる。そして，学習を計画するにあたっては，その子の思いが生まれるような題材を設定すること，そこに子どもの表現が深まるような造形活動の過程が含まれていることが重要なポイントになると考えている。このことについては「題材設定について」で述べる。

3　研究テーマについて

（1）設定の理由

子どもは，たくさんの木切れを見ると，並べたり組み合わせたり何かに見立てたりする。また，紙を手にすると，何かを描いたり折ったり丸めたりする。このように，「つくる」ことを楽しむ姿が生活のいろいろな場面で見られる。しかし，「つくりだす」喜びは，対象と出合い，思いをもって対象とかかわる（追求している）活動の中で表現の手応えを感じ，そこから得たエネルギーをもとに対象とのかかわり方を深め，試行錯誤しながら自分の思いやイメージに近づこうとしている（追究している）時に初めて味わえるものであると考えている。

子どもが「つくりだす」喜びを味わえるようにするためには，自分の活動の手応えを感じられる場面を学習の中で用意していかなければならない。活動の手応えを感じた子どもは“もっとこうしたい”“次はこんなことを”という新たな思いを持つだろう。これは，子どもの表現意欲の高まりが見られる場面である。表現意欲の高まりとは，意欲が持続すること，表現欲求がより具体的な形である，言葉や行為として表れてくることである。そして，表現意欲が高まってくることにより，発想や構想の力，創意工夫しながら手を働かせて描いたりつくったりする力，よさや美しさを感じ取る力が育っていくだろうと考えた。よって，今年度の図画工作科の研究テーマを

「自分らしいよさや可能性を発揮し，つくりだす喜びを味わう図画工作科学習
～意欲の高まりと表現のひろがり～　」

として取り組んでいる。そして，そのテーマに迫るためには，

- 子ども一人ひとりが持てる力を十分発揮できる学習をつくりだすこと
- 造形活動そのものを内容や学習対象にした題材であること
- 子どもが持てる力を働かせている様子を捉え，その子らしさの表れをみとり，適切な支援をすること

を中心に考えていきたい。これらについては，以下にあげる「題材設定について」「まなざしの共有」で述べる。

（2）題材設定について

図画工作科学習で，子どもが「意味と内容」をひろげていけるようにするには，題材の果たす役割が大きい。子どもが自由にものや人とかかわり，一人ひとりのよさや可能性を活かし，自分の思いや願いを表せるような題材を設定することが重要となってくる。

「題材」とは本来，学習における表現対象であり，学習をつくっていくもととなるものである。そして，「題材」によって，子どもの表現意欲が喚起されることも確かである。子どもは，対象に働きかけることでその意味を生み出し，そこにまた働きかけることで変化したものに，さらに新しい意味を見出していく。そして，その営みを繰り返す。このよう

な子どもの姿が引き出せるような「題材」設定を心がけたい。そこには，子どもがつくりだす喜びを感じることができる手応えが用意されていなくてはならない。
それは，

○“もっとしたい”“次はこうしてみたい”と感じられるような課題意識を与えられるものであるかどうか

○子どもの表現活動がひろがる可能性をもつものであるかどうか

である。 これは，学習のねらいとかかわるものであり，教師がこれを軸に学習を計画し，題材設定をするのには，はずせない重要なポイントである
これらをふまえ，題材設定の時には次のような点に留意したいと考えている。

・子どもにとって魅力的な色や形，材料や場所を扱った題材であること
・自分の表現が選択できる学習過程が設定されていること
・子どもの発達段階をふまえていること

また，カリキュラムを組むときには，色や形，材料や場所にかかわった学習の中でも，子どもが見たことや感じたことや自分の思いをひろげて，思いのままに表現することをねらいとした題材と，子どもが感覚を研ぎすまして，自分なりの表現を見つけたり生み出したりすることをねらいとした題材の両方を組み合わせるようにしたい。そうすることにより，子どもの見方や感じ方，対象とのかかわり方，表現方法にひろがりや深まりが生まれ，その子らしいよさや可能性を発揮できるようになると考えている。

4　図画工作科学習での「まなざしの共有」

図画工作科でのまなざしの共有とは，教師が子どもをみとり，適切に支援すること，子ども同士がお互いのよさを認め合うことであると考える。そこで，「まなざしの共有」を，子どものみとりと支援（子どもと教師の「まなざしの共有」）と造形活動におけるコミュニケーション（子どもと子どもの「まなざしの共有」）の二点から述べたい。

（1）子どものみとりと支援

子ども一人ひとりの見方や感じ方，表現方法，そして，その学習過程を大切にする図画工作科の学習では，教師がさまざまな活動の場面を捉えて，一人ひとりの思いをみとり，どう支援していくかが，学習のひろがりや深まりを左右するといえる。また，子どもの意欲の高まりにも影響する。そこで，具体的に次のような手だてを用いて，子どものみとりに活かしたいと考えている。

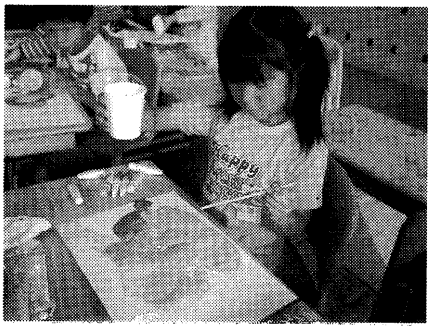
・子どものつぶやきを取り上げたり，記録したりすること
・学習の表れである，活動の様子や作品などを記録すること（写真，ビデオなど）
・学習カードを効果的に活用すること

子どもたちのつぶやきは，心の動きの表れである。それを知ることは子どもの見方や感じ

方を知ることにつながる。それらを記録することは支援の重要な手がかりとなる。そのつぶやきが全体に必要な気づきであったり，活動の大切な要素になったりすると考えられる場合は，学習の中でも意図的に取り上げたいと考えている。そして，活動の様子やその表れとして生まれてくる作品を記録することは，活動の過程で自分の表現を確かめることができるとともに，後でその記録を通して活動や表現を振り返ることができるというよさがある。また，学習カードは，学習の中で持った思いや願い，悩みを絵や言葉，文章にして残していくもので，子どもの学びの足跡となっていくものである。これらは，子どもが自分の活動や表現をすすめていくのにも活かされるのと同時に，教師が子どもの見方や感じ方，表現や活動をみとり，適切な支援を考えるのに活かされる。教師はこれらを通じて，その子の思いや活動の進み具合，その子のつまずきを知ることができる。そして，子どもが必要としている場面をとらえて，言葉かけや技能面での指導などを行うことができるのである。

（2）造形活動におけるコミュニケーション

造形活動をしているときの子どもたちは，自然な形でコミュニケーションを取り合っている。対象に働きかけながら，自分のイメージをふくらませたり，表現方法を構築したりして，新しい活動や表現をさがしていくには，まわりとのコミュニケーションが大切になってくる。まわりとのコミュニケーションとは，周囲の環境であり，身近にある素材や道具であり，いっしょに学習に取り組んでいる友達であり，仲間であるといえる。子どもたちはそれらと自然にかかわり合っているのである。



2年生「みてみて　アレレ？！」より

ひとつの題材から学習が始まっても，子どもたちはさまざまなものに目を向けている。“自分の表現から生み出したものが違う場所に飾られたらどう見えるだろう”と考えて，場所を探すことは周囲の環境とのコミュニケーションであるし，“あの素材と組み合わせたら・・・”“あの道具を使ったら・・・”と考えることは素材や道具とのコミュニケーションであるといえる。また，友達の表現やよさに触れることや一緒に試したりつくったりすることで，自分の思いがはっきりし，表現することの意欲が高まってくることも多い。そして，これらのコミュニケーションから得たことやよさを採り入れながら，活動や表現，そこから生まれる学びがひろがり，深まっていくだろう。題材のねらい，子どもの思いや活動の様子に応じて，そのような効果的なコミュニケーションの機会や場面を意図的に設定することも心がけたいと考えている。